

# 匠 瑳 探 訪

## 大火と消防

「火事とけんかは江戸の華」といわれたように、消防力の乏しかった時代は、江戸の町火消しが命がけて消火にあたっても大火が絶えませんでした。

現在の中央地区、かつての八日市場村でも江戸時代に二度の大火があり、旧暦ながらともに2月に発生しました。

167年前の1840年（天保11年）の大火は、2月1日午後8時ごろ発生しました。当時の八日市場村の家数は415軒ほどで、7割を超えるおおよそ3

00軒と商家の土蔵40が焼け落ち、近年にめずらしき大火災」と記録に書かれています。

火元は田町で、西風にあおられ田町坂下から本町、横町、門前（見徳寺周辺・万町）から富谷村境まで延焼し、見徳寺と天王様（てんのうさま・八重垣神社）も焼けました。現在、街中に見られる土蔵はこの後のものです。

当時の消防は若者組を中心に組織され、燃える物をなくし延焼を防ぐ破壊消防でした。「雲龍水（うんりゅうすい）」とよばれる現在の消防ポンプにあたる道具があったものの「ないよ

りは良い」という程度でした。337年前の1670年（寛文10年）の大火は、2月22日の晩に起き、見徳寺門前に住む人が火元で、同寺の山門やお堂が焼け、「八日市場村の百姓、前後覚えなき大火事」でした。

また、消防組が組織されなかった明治の初め、飯塚（豊和地区）と住方（すみかた・吉田地区）、金原かなばら・飯高地区）などでも大火がありました。

消防団の前身の「消防組」は、明治の町村合併が済んだ1897年（明治27年）ごろから町や村ごとに組織されるようになりました。市域では榑海村がもっとも早く、八日市場消防組の発足は1910年でした。大正期には、匠瑳郡14組村）の69部・3000名の組員参加のもと郡消防連合演習が行われました。

消防組は昭和14年に解散し、「警防団」となり警察の指導のもと、戦時体制下で防空・消防活動に従事しました。

戦後、昭和22年5月の消防団令により、警防団は廃止され消防団が町村に設置されました。翌年には警察から分離し、自治体消防制度が発足、常設消防は1968年（昭和43年）4月1日に消防署と消防本部が設置され、現在に至っています。

問八日市場図書館

☎73・3746



今も飯高寺に残る雲龍水